



TOHOKU GAKUIN
UNIVERSITY

文学部総合人文学科主催 公開講演会

一神教、 イコノクラスム、 物質文化

<Vénissieux (Lyon), 11 October 1994, Photo Pompiers de Lyon>

申込不要

どなたでも
受講できます

受講無料

2019年

7月6日^土 14:00~16:30

場所 | 土樋キャンパス
ホーイ記念館ホール



<ヒラントル修道院(ギリシア、アトス)2004年3月3日>

講師



更地論：日本における物質文化

東北学院大学教授
鐸木 道剛 (すずき みちたか)

【講師略歴】1950年大阪生まれ。1974年東京大学文学部卒業。1976年よりユーゴスラビア政府給費留学生としてベオグラード大学留学を経て、東京大学大学院博士課程中退。1980年より岡山大学助手。岡山大学教授を経て、2016年より現職。1993年「辻一・三浦アテナ記念学術奨励金」(立教大学)受賞、2011年「セルビア国旗勲章第三等級章」受勲。主著に『イコン：ビザンティン世界からロシア、日本へ』(毎日新聞社、1993年)、『山下りん研究』(岡山大学文学部研究叢書、2013年)など。

美術の破壊は、8世紀ビザンティンや16世紀宗教改革、18世紀フランス革命の昔のことではなく、2001年のニューヨーク貿易センタービルの破壊、バーミヤンの石仏破壊によって改めて喫緊の問題となった。物質文化を肯定する根拠がなければ破壊に抗することはできない。わが国では、既に13世紀初頭に鴨長明が『方丈記』のなかで一丈(3メートル)四方の間での生活を提唱している。そこには仏典と仏画と楽器しかない。20世紀においても坂口安吾(1906-55)は「無きに如かざるの精神」を記す(『日本文化私観』1942年)。わが国における物質文化はどうあるべきか。このことは2011年の東日本大震災で大量の物質文化の破壊を経験した我々にとっての復興を考えることでもある。近代的な復興か、あるいは伝統的な物質観か。そこにはキリスト教の唯物論と仏教の不可知論が関わっているはずである。

<創造的破壊>、保存、記憶
'Creative Destruction', Preservation, and Memory



ジュネーヴ大学教授
Dario Gamboni 氏 (ダリオ・ガンボニー)

【講師略歴】1954年イヴェルドン(スイス)生まれ。ローザンヌ大学(スイス)と国立社会科学高等研究院(フランス)で美術史を学ぶ。1989年にルボン研究によって博士号を取得。リヨン第2大学(フランス)、ケース・ウエスタン・リザーヴ大学(アメリカ、クリーブランド)、アムステルダム大学(オランダ)で教授を務めた後、2004年よりジュネーヴ大学(スイス)美術史学教授。主著に『芸術の破壊(Destruction of Art: iconoclasm and vandalism since the French Revolution)』(Yale University Press, 1997年)、『潜在的イメージ：モダン・アートの曖昧性と不確定性』(三元社、2007年)、『<画家>の誕生：ルボンと文学』(藤原書店、2012年)など。

Large-scale destruction of artefacts can result from natural disasters, from intentional iconoclasm, and from the cult of innovation that produces or justifies planned obsolescence, 'creative destruction', and technological disruption. Since the turn of the century, the financial crisis and the digital revolution have expanded the scope and accelerated the pace of this destructive dynamics, while islamist iconoclasm has condemned as idolatry both the secular notion of cultural heritage and the religious veneration of material bearers of memory such as graves and shrines. The human and ecological cost of this disqualification of materiality calls for a questioning of its motives and for a reconsideration of the values of preservation. The attachment to things, it will be shown, including monuments and works of art, does not stand in opposition to the respect of human life and notions of the spirit or creativity. Quite on the contrary, it corresponds to the bodily nature of human existence and is essential to the possibility of cultural memory and continuity.

主催／東北学院大学 文学部総合人文学科

共催／東北学院大学研究ブランディング事業「東北における神学・人文学の研究拠点の整備事業」

問合せ／東北学院大学 研究ブランディング事業推進室 TEL・FAX 022-264-6547 E-mail : branding@mail.tohoku-gakuin.ac.jp